思考の可能性としての建築

Architecture as the Possibiliy of Thinking

竹山　聖
Kiyoshi Sey TAKEYAMA

The meaning of Logos, which we heard from Heraclitus – according to Heidegger's interpretation, this is "Being" – was later substituted with the sole "Word of God." The result was a "Transcendental Logos," through which the desire for architecture became an exclusive desire of the ruling class. The original desire for architecture was born when human beings became aware of the "possibility of changing the world." When captured by the ruling class, architecture came to express the will of power – the "Will to Truth," in the words of Michel Foucault – and became a sole architecture. Logos should be once again returned to the place of the individual. There are diverse types of "Logos of jouissance," in other words "Individual Logos," brought through the natural medium of an individual body. Architecture does not have a sole solution led by the "Will to Truth" of a "Transcendental Logos," but has a diversity supported by the ethics of an "Individual Logos." As opposed to the so-called Babel of sole architecture, this is anti-Babel, and as Jacques Derrida has said, it is precisely the collapse of Babel that makes architecture possible. We can then reinterpret "architecture" as "thinking of infinite possibilities." Derrida perceived architecture as thinking that is on a path, in a vortex, opening the way for thought, pregnant with intent toward the sole and absolute truth while deviating toward opening infinite possibilities. This thinking is not transcendental but immanent, thinking that adapts to things as well as approaching the limit of words, thinking that passes through the body while led by consciousness. He locates architecture in the so-called realm of possibility of thought. Through architecture as liberated imagination, human beings have been able to travel toward infinite possibilities. That is why human beings have been tirelessly designing architecture as history continues to be made. There are infinite solutions. There is no sole way. Architecture is always a possibility of new thinking.

悟性は単純を好む。　　アンリ・ベルグソン[*1]

A．ロゴスの位相

誤れる判断を断念することは、生そのものを断念し生そのものを否定することである。　　ニーチェ[*2]

1　存在の声

ロゴスは一般に、理性、ことわり、見る目、見ぬく力、あるいは説明の方式、論理、配列の秩序、思考を意味している[*3]。語源としては、ギリシア語のレゲイン [集めること、語ること] から生まれたロゴス [集められたもの、語り] であって、古代ギリシア人たちは宇宙と人間のあいだに働く法則そのものをロゴスと呼んだ[*4]。ところでハイデガーによれば、ギリシア人はロゴスの語にいまだ「言葉」や「語り」をめったに思うことはなく、むしろ「一方のものの他のものへの関係」というもともとの意味を、ずっと保持し続けた[*5]。つまり単一物でなく関係を表す概念だ、というのである。

なるほど集められればそれらは単なる個物でなく、関係を持った集合体となる。そういえば言葉とはそもそも個物相互に関係を見つけ出し、これを定着し、伝えるために人類が編み出した手立てであった。命名された個物はおのずと関係の相の下におかれる。

ハイデガーの説明に耳を傾けてみよう。たとえばヘラクレイトスはロゴスを聞いた、という。いまだ神の声ならぬ自然の声だ。個物が関係しあって全体を奏でる物質世界である physis ＝存在の声を聞いた。すなわち神の言葉でなく、自然からおのずと湧きあがる力と力の関係であり、そこに働く原理、すなわち「存在の声」を聞いたというのである。ハイデガーはまずロゴスをパルメニデスにならって「存在者そのものの集約態」と定義し[*6]、ヘラクレイトスがこれに呼応して発した「存在の声」という言葉を充てる。存在者相互が働きかけ、また呼びかけあってもいる、その声だ。つねに古代ギリシア

*1 アンリ・ベルグソン『思想と動くもの』河野与一訳、岩波文庫、1998(1934)、p. 330

*2 ニーチェ『善悪の彼岸』p. 15。この文章のあとに、「非真実を生の要件として承認する――、これはもちろん、日常化された価値感情に危険な反抗をすることである。これをあえてする哲学は、すでにこの一事をもってはや善悪の彼岸にある」と続くのである。

*3 ハイデガーは『存在と時間』において「ロゴスの概念」の項を立て、後世の哲学がいかにしてこの語から「理性、判断、概念、定義、根拠、関係」などを引き出したかを概観している。『存在と時間(上)』「ハイデガー選集XVI」細谷貞雄・亀井裕・船橋弘訳、理想社、pp. 64 − 68

の哲学者のただなかにあって思考しようとしたハイデガーによれば、「存在の声」すなわちロゴスとは、「存続的集約であり、存在者の、自己の中に立つ集約態、つまり、存在」[*7]そのものであった。そしてなお、ただ単に集めるのでなく、「対抗し争うものをひとつにする」[*8]、すなわち統合する力であった[*9]。ばらばらの個物を集めてこれに関係を賦与し、統合する。そのような力であり、これを指し示す「言葉（＝ロゴス）」、それが「存在の声」であった。

フロイトの用語法では、エロスもまた統合する力であった。しかしロゴスとは異なる統合である。ロゴスは法則をもち、論理をもち、一つの世界に向かう。エロスはメタフォアとメトニミーに導かれて玉突きのように世界が連ねられてゆく。ロゴスは関係を収束し、エロスは関係を発散するともいえよう。エロスが個の側から見て、個から全体へと広がってゆく統合の力であるのに対して、ロゴスは存在の側から、いわば自然の側から見て、全体から個物へと向かってゆく統合の論理である。ロゴスが予め担う収束を、エロスは前提しない。エロスは個体が惹かれる力、惹きつけられる力であるから、ただドライブされて心は動き、あてどなく、つまり目的をもたぬ逸脱の運動を生む。これに対して、流れ出した欲望に、ロゴスは意図と目的をもった方向性を与える。エロスが個の欲望に根ざすとするなら、ロゴスは自然の論理に根ざしている。したがってそれは個体に対して超越的な位相にあり、個のエロスの内在性に対立している。いわば、ロゴスは超越であり、エロスは内在である。建築的思考は両者をともに視野におさめる。建築的欲望はロゴスとエロス、この両者の反転のダイナミズムによって作動している。建築は概念の上でも、行為的な側面においても、超越的側面と内在的側面をあわせもつからであり、それらは相補的な関係にあるからである[*10]。

このロゴスが後世の哲学によってゆがめられてしまい、「特定の体系的予断」に染め上げられてしまった。その硬直したさまを描き出したのがハイデガーであり、またそこにロゴス中心主義 logocentrisme や音声中心主義 phonocentrisme を見て、西洋形而上学の脱構築に向かったのがデリダである[*11]。かれらによって、遡るべき根源として提示されたのが「存在」と「エクリチュール」であった。

では、ロゴスがかくも「特定の体系的予断」にすら結びつく構築の原理となったのはなぜか。ハイデガーに即して眺めてみよう。もともと集められたものの秩序、関係を司る原理という意味合いをもったロゴスが、やがて語り、話となり、形而上学的な論理となって、後世の意味のずれと展開を準備したのだったが、決定的な事件は聖書の翻訳において起きた。これはギリシア語訳（セプトゥアギンタ）[*12]で「ロゴス」と訳されたことに端を発している。しかもそれが「語」であるばかりか「命令」や「訓戒」のニュアンスをもつことから、その「告知者」「使者」を意味するようにもなった。そこでキリストがロゴスなのである。ロゴスは神の子によって体現され、すなわち神と人との媒介者を意味するようになる。やがて聖書が唯一の真理を運ぶ書物となるや、ロゴス＝言葉は圧倒的な猛威を振るうようになったのである。

ロゴスが神の代理人となる。ここでヘラクレイトスから大きくずれてしまった、とハイデガーは嘆いている[*13]。自然の声が神の声に回収されてしまったからである。かくしてロゴスは神の言葉となり、神の意図、神の計画、神の意志を表すようになった。これが理（ことわり）というものである。世界には理がある。神の意志が隅々まで行き渡って、人間はその意志の中で、意志にしたがって生きるよりない。この一神教、世界の造物主としての神、なる概念と結びついて、ロゴスは自然から神へとその発出の源が移し変えられた。

神の命令であるか自然の声であるかによって、大いにそのありように違いがあるとはいうものの、ロゴスは世界を構成する原理となる。ロゴスは分母となる。個と他の対峙するステージとなる。ロゴスはいまや神の言葉である。言葉は他者の語らいである。個のうちに他者を呼び込む[*14]。すなわちロゴスは他者からやってくる。

ひるがえってまた建築に目を移してみよう。建築とは一つの世界を構成する行為であった。他者のただなかで、他者に抗い他者に寄り添いつつ、事物の関係を構築する行為であった。事物の結構を通して世界を打ち建てる。それが構築である限り、そこにはしかるべき意図が要請される。多くの人々

*4 ハイデガー『シェリング講義』p. 88。『英語の語源事典』梅田修、大修館、1990. には「logos は legein(to pick up, gather, count, tell, speak) から派生した言葉である。to count という意味は to gather similar things in mind から移転したものであり、to calculate, reason, explain, speak と意味が拡大した。それとともに名詞 logos は、gathering, calculation, consideration, reason, word と発展し、更に、truth, law, nature, spirit をも意味するようになる。数学の分野では、proportion, relation, measure, order という意味に使われた。古代ギリシアの哲学者たちは宇宙（macrocosm）と人間（microcosm）の関係がどんなものであるかを探求したが、宇宙と人間の関係の真の姿を logos によって求め、宇宙と人間の間に働く法則そのものを logos と呼ぶようになるのである。そしてギリシアの哲学とユダヤの宗教が融合する過程で、logos は holy doctrine という意味に使われ、その logos が人格化されて神（God）という意味になった。」（p. 252）という明快なまとめがなされている。

*5 ハイデガー『形而上学入門』川原栄峰訳、理想社、1960(1953)、p. 159

*6 ハイデガー、前掲書、p. 165

*7 ハイデガー、前掲書、p. 167

*8 ハイデガー、前掲書、p. 171

*9 ハイデガーは『存在と時間』「ロゴスという概念」の中で、この概念がただ事物を率直に見つつ聞きつつ「真理概念から解放され」ながら関係づける概念であって、古代ギリシアではむしろ真なるものは感覚（アイステーシス）であったと指摘している。真であれ偽 s であれ「あらわにし、かくして他人に近づきうるものにする」。そこで「理性」を意味し、「根拠」(レゴメノン＝ラティオ) を意味し、「関係づけられている」ことにおいて、「関係」「比例」を意味するのである。:「存在と時間」『世界の名著 74 ハイデガー』原佑・渡辺二郎訳、中央公論社、1980、pp. 107 - 110

*10 対立の位相をやや異にするが、Bernard Tschumi は、'The Architectural Paradox : The Pyramid and Labyrinth', "Questions of Space : Lectures on Architecture", The Architectural Association,1990,pp.11-29. において、建築の超越的側面と内在的側面を概念的位相と経験的位相の対立ととらえて、これにピラミッドとラビリンスというメタフォアを与えつつ、議論を展開している。すなわち非物質的抽象へと向かう側面と、具体的経験へと向かう側面である。本論考では両者をともに幻想の領域においており、むしろ意識と無意識の対立としてとらえている。言葉と身体の対立という視点を介在させるなら、両者に共有する問題意識を見出すことができる。

を動員する営みであるからなおさらのこと、組み立て、統合する意志が必要とされる。これをロゴスと呼んでいい。いわば導きの言葉であり、文字通り空間の論理である。ただし建築において、こうしたロゴスがはなから見通され、前提されている類のものであるとは限らない。むしろ見通しえない状況から、内在的に空間を開きゆく行為に建築は裏打ちされている。身体を包み込む空間の構想に根ざさぬ超越的ロゴスは建築行為の地平を開く言葉とはなりえない。ただのシュプレヒコールにとどまる。そもそも最初から前提されるロゴスをイデオロギーと呼ぶのではなかったか。

設計の現場を冷静に振り返れば、建築の出発が決して堅固かつ確実なロゴスの内にあるのではないことに気づく。ロゴスは想像力の導き手であるが、同時に抵抗でもある。導き手である場合でも、ロゴスの底に建築的欲望を見出すことができなければ、想像力は枯渇へと向かう。むしろ、奔放にほとばしりでるエロスがあり、その流れのさなかにロゴスを見出す構えがそこにはある。建築的欲望は、誘惑される想いと冷徹な計算の緊張の内にこそ生成するのである。

そもそも建築行為において、踏み出す方向が予め定まっているわけではない。神のロゴス、超越的ロゴスがあるわけではない。あらかじめ道はない。マニュアル化は不能だ。あまりに膨大な与件に取り巻かれているからであり、取捨選択をおこなうにしても、その方法が無限といっていいほどに多く存在するからである。それは多様な可能性に向けて未踏の地に足を踏み出す行為にほかならず、確たる論理というより漠然たる直観に導かれざるをえない。いわば試行錯誤の行為である。ある方向に掘り進み、困難に突き当たり、これを打ち破るか迂回するか別の道を探るか、行為はその連続である。この行為を的確な方向に導く直観を鍛えるためにトレーニングが必要となる。このとき直観は身体化された論理となる。これはスポーツや音楽になぞらえることができるかもしれない。

自然の声に耳を澄ませ、自らの身体を同調させる。ロゴスに耳を澄ませ、エロスに身をまかせる。そこに建築の萌芽は呼び出される。ロゴスはエロスの運動の内に徐々に姿を現してくる。エロスのさなかにロゴスの影を探る。つまり欲望のさなかに意図を、そして意志を手探る。

建築は自然の素材を用い、自然の原理にしたがって立ち上がるものであるから、まさしく自然のさなかに意図を見出し、結晶させる行為である。ロゴスを見出す行為である。しかしその行為はあくまでも個の身体の応答を前提している。行為的直観を前提している。自然から響いてくる声への身体的応答、これがエロスである。ロゴスはエロスを通過する。すなわち建築の意志は、いったん身体を通過する。

とはいえ、ロゴスもまた、もともとは自然から響いてきたのだ、とハイデガーは指摘したのだった。ロゴスは多様で不均質な「存在の声」であった。ところが、後世の哲学者や宗教者たちにいじくりまわされてしまい、ついには神の言葉へと転化してしまって以来、ロゴスは社会の均一へ向かう全体主義的なアピールとなった。もはや個の逸脱は許されず、ロゴスは享楽の断念を要求する。享楽は個に属するからである。ロゴスは個を圧殺する。ロゴスに対するこの汚名を雪がねばならない。

多くの宗教において個の享楽が禁止されているのはゆえなきことではない。強大な宗教ほど禁欲をばねにしている。ともすればばらばらな方向を向いてしまいがちな個を、強靭な共同体へと組織し、集合化することが宗教にとって力となる。よるべない個を導く力となる。死は、それがすべての生命体を襲う出来事であるだけに、死をめぐる想像力の鮮やかさは絶対的な力となる。多様な生の断念と死の共同体へ。しかもこの断念のうちにこそ、個を捨てる甘美な満足が隠されている。このことを見過ごすべきではない。

一言でいうなら、心をひとつにすること、これが宗教的愉悦の根源である。心をひとつにする誘惑とは、個を捨て去り、全体のうちに溶け込む判断停止の誘惑である。政治的には全体主義がそうであり、20 世紀はこうした心をひとつにすることの恐ろしさがあまねく世界の人々に行きわたった時代でもあった。音楽とスポーツにのみ、今その誘惑は許容されている。むろんいまだ宗教や政治の領域はこれをひそかに行おうとする欲望が渦巻き、満ち満ちている。確かに対立や緊張は緩和される。ただしそこでは欲望もまた抑圧され、世界を改変する意志は指導者、あるいは独裁者の手にのみゆだね

*11 ハイデガーは konstructiv という言葉によって、「事態そのものに即することなく特定の体系的予断にもとづいて理論を構えること」（傍点筆者）を指した。（ハイデガー『存在と時間（上）』「ハイデガー選集XVI」細谷貞雄・亀井裕・船橋弘訳、理想社、p. 384 訳注。ただしここでは「構成的」と訳されている。ちなみに２０世紀アヴァンギャルドを代表するロシア構成主義も「構成主義」と訳されるが、その原語は konstructivism である。）とするなら、ハイデガーの注意深い読み手であるデリダが deconstruction という言葉によって指し示そうとしたのは、「特定の体系的予断から離れること」にほかなるまい。問われているのは構築そのものでなく、構築の底に潜む特定の体系的予断である。構築という行為自体は、事物の関係を見いだす建築という行為の根底にある。

*12 ヘレニズムでギリシア化されたアレキサンドリアのユダヤ人の子弟はもはやヘブライ語が不自由となったため、かれらのために当時の日常語であったコイネーと呼ばれるギリシア語訳されたユダヤの聖典、70 人訳と呼ばれる旧約聖書。前２世紀頃の完成とされる。ちなみに「はじめに言葉があった」ではじまる新約聖書のヨハネ福音書は、コイネーによっており、この 70 人訳聖書の影響が強い。

*13 ハイデガー『形而上学入門』川原栄峰訳、理想社、1960(1953)、p.172

*14 言葉はもとより幼児にとって他者からやってきて自らをのっとってしまうものだ。いわば他者そのもの。ラカンは、「<他者>とは、そこで、聞いている人といっしょに話している私が構成される場所」であると語っており、この意味では<他者>こそがステージでもある。：ラカン『エクリⅡ』弘文堂、p.152

*15 ユートピア思想家の理想主義的な反動性はつとに指摘されているが、たとえばジル・ラプージュもその卓抜なユートピア論、『ユートピアと文明』（中村弓子・長谷川泰・巌谷國士訳、紀伊国屋書店、1988）において、「ユートピストとは、だから奇妙な精神の持ち主である。彼が自由の手段を発見するのは、自由を抹殺するためだ」(p. 23) と述べている。1. 反ユートピスト：歴史から身を引き、始原を夢見る、2. 歴史の立場に立つ人間：弁証法を道具とし、変貌に目を向ける、3. ユートピスト：秩序の人、時を止める人々、弁証法をまったく持ち合わせない、の三タイプに分け、「ユートピアは人間中心主義に始まるが、そのひそやかな幻惑はニヒリズムである。完全な都市に対する志向は、砂漠への志向に帰結することもありうる。その透明な社会が闇と苦悩の集団を産むこともありうるのだ」(p. 30) とユートピアの時間を凍結した硬直性に危惧を唱えている。よくも悪くも人類を導いてきたユートピアは、いわば善意の反動とでもいう役割を果たしてきたのだが、辛辣な言辞で知られる知識人であり無国籍者、シオランは「正真正銘のユートピアを抱懐し、確信をもって理想社会の画像を描いてみせるには、ある種の無邪気さが、極言すれば頭の悪さが必要とされる」とすらいう。：E.M. シオラン『歴史とユートピア』出口裕弘訳、紀伊国屋書店、1967(1960)、p.130

られる。世界の改変はそれ以外のものには許されない。そのような意志をもつこと自体が禁じられる。

そうした社会では、建築の欲望もまた、社会のうちに回収されてしまうだろう。建築の欲望はそもそも共同体の欲望であるから。そして個人の欲望も超越者の欲望と同調せねば建築は成立しないから。もし共同体を体現するのが独裁者あるいは少数の指導者になってしまえば、建築の欲望は支配者のみに許される欲望となる。このとき社会は安定することだろう。建築の欲望はもとをただせば世界を改変する意志だ。危険な意志だ。ロゴスが「特定の体系的予断」に結びつく構築の原理となり、これが支配者側に取り込まれたとき、建築はいわば御用達の技術となる。改変の意志は消え、建築という行為もまた消滅する。かくして建築は飼いならされ、社会のシステムの一部に組み込まれ、造物主の代理表象となる。いわば唯一の建築となる。自由は圧殺され、個は去勢されて、ここに「ユートピア」が出現する。「ユートピア」は超越的ロゴスに憧れ、つねに去勢を前提している。*15

個のロゴス　2

重ねていうが、ロゴスはしかし、ハイデガーの説くように、はなから神の言葉であったわけではない。それは自然の声であり、physis そのもの、言い換えるなら唯物的な原理である。これがやがて神の言葉となり、その文明が地球を支配した。しかしながらロゴスはやがて個の場所にもたらされることを、歴史は教えている。理性は共同体というより個に帰属する。デカルトが我の思惟に存在の根拠を見出し、カントが理性を至高の認識装置に鍛え上げ、ヘーゲルが理性を国家の原理とした。ロゴスは神の占有物を経て、個々人のもとに送り届けられるようになった。これが近代である。個のうちに分けもたれてはじめて、ロゴスは自由な生の指針となる。ロゴスを唯一絶対の真理でなく、個別の真理とすること。神の無条件の指令としてでなく、個の自発的な言葉とすること。超越者からやってくる命令ではなく、自由に運動する個体に内在する秩序の根拠とすること。全体による圧政の手段でなく、個の表現のよりどころとすること。ロゴスを個の場所にもたらさねばならない。そのときはじめて、ロゴスは淀みを脱し、社会と個を結ぶ流れとなる。

社会は個に侵入し、個を社会化する。もとより社会は個の中に胚胎された概念である。それは個の内面に反射して、複雑なゆがみを見せるだろう。ときにエロスと結び合い、不均質で多彩な様相を呈しつつ、神の言葉はふたたび「存在の声」となるだろう。自然の呼び声が戻ってくる。個はそこに享楽の響きを聞くことだろう。個の場所にもたらされたロゴス、すなわち「存在の声」。これを享楽のロゴスと呼ぼう。いわば個に発するエロスを煮詰め、そのエキスを抽出し、結晶として析出したロゴスであって、神の言葉を暗示しつつも、それは個人のものだ。個が空間を構想するときに聴く「存在の声」、それはそのまま、自然に、そしてものに導かれた統合の論理となる。

享楽のロゴスは神の言葉の反映であるが、同時に屈折でもある。個の身体という自然によって変容された言葉である。欲望が倫理を要請する。身体に媒介された言葉は、身体の自然を通過して屈折した言葉は、ロゴスという大文字の他者*16――「真理の保証人」――にさらされた個の倫理を内包している。個にもたらされたロゴスは倫理である。言葉はそこで、命令と認識の言葉から、自発的行為の言葉となる。個のロゴス、すなわち倫理に支えられて。建築という行為はここに発している。命令や認識にではなく、自発的行為に。単に個の自由な戯れでなく、共同体の抑圧を経て、自然の論理を経て、また身体の歪みを経て、自らの投げ出された世界を受け止め、世界を変容し、世界へと投げ返す。個のロゴスという倫理の声を交わしながら。そう、建築は個のロゴスの反映である。すなわち倫理の反映である。構想にはあらかじめ超越者の命令が、そして共同体の欲望が、自然の論理が、刻印されているとはいうものの、そこに立ち現れる空間は、超越者の命令を、そして共同体の欲望を、自然の論理を、個の位相へともたらしながら、個の側から超越者、共同体、自然へと投げ返す。建築のまなざしは、したがって超越的な視線と内在的な視線の交差点に現れ、そのあわいを揺れ動いている。単純の個の欲望の発露ではなく、芸術的表現の発露でもない。個のロゴス、すなわち倫理は、他者の場をくぐっている。倫理とは、倫（とも）にあることの理（ことわり）、すなわち他者との関係のあるべき姿だ。それは場における抵抗に応答して形成される場の思考である。

*16 ラカンは言葉によって出現する象徴界の、その意味の起点に父の名、いわゆる「大文字の他者」を置いた。「私がこれまでにも、無意識とは、大文字のAをもつ<他者（l'Autre）>からやってくる話であると言ったのは、欲求を認知するという行為が、そこで認知したいという欲求に結ばれているような、あの彼方を示すためです。別の言い方をすると、この他者とは、私の嘘がそのなかに他者の住まっている真理の保証人としてその援助を求めているような、あの<他者>であるということになります。それゆえ、まさしく言葉の出現によって、真理の次元がはっきりと生じてくることがわかるはずです。」フィクションを支える他者は、意識の上で捉えるなら超越的な存在であるが、無意識の中に内在し、それが私たちに語りかける、とラカンは言うのである。真理の保証人として語りかけるのは言葉、すなわちロゴスである：ラカン『エクリII』p.278。

欲望は他者によって触発され[*17]、個のロゴス、すなわち倫理は、やがて欲望の温床となる。逆説的に聞こえるかもしれないが、欲望の火を燃えさからせるのは個のロゴス、すなわち倫理である。いわば欲望のエチカ。倫理のみが欲望に明確な形を与えてくれる。他者との関係——ロゴス——のみが個の欲望——エロス——を作動させる。社会の中にありつつ個人として生きる倫理が、享楽の強度を支えている。享楽が、個に胚胎される喜びが、自覚された遊戯が、壁に堰きとめられてほとばしる自由の可能性が、ともすれば全体主義へと向かう超越的ロゴスの流れを分岐させるのである。

かくして建築という行為のさなかに、他者にさらされ磨きぬかれた個人の意志があらわれる。それはエロスの欲望の中から研ぎ澄まされた意志——超越的ロゴスに対してあえて名づけるのなら内在的ロゴス——にほかならない。これが建築空間に込められるべき意図となる。あたかも神の言葉のごとき決断であり、思想であるとすらいってもいいが、決断するのは神ならぬ人間であって、この自覚にもとづく逡巡を通した決定である。神の声を個の祈りに転換する。個の身体をくぐらせた存在の論理。反動的ユートピストでなく批判的個人となること。これが建築行為の倫理である。倫理はそもそも個人のうちに胚胎される。学問は一般化されることによって意味をもつが、思想はあくまで個人の態度であって、建築は、そして建築という思考の態度は、と言い換えてもいいが、まさしくそこに根ざしている。

個のエロスに根ざさぬ建築は貧しい。個のエロスが享楽のロゴスにまで鍛えられぬ建築はなお貧しい。

*17 ルネ・ジラールはその著『暴力と聖なるもの』（古田幸男訳、法政大学出版局、1982、p. 22）において、人間が欲望するものを三つあげている。第一が「他者」、第二が「他者が所有するもの」、第三が「他者が欲望するもの」、この三つである。

3　思想はひとつの意匠であるか

「思想は一つの意匠であるか」と、仏がこう問うた。[*18]

> *「思想は一つの意匠であるか」*
> *仏は月影を踏み行きながら*
> *かれのやさしい心にたづねた。*

仏は月の光の下を静々と歩みながら、自らの心にこう問いかけるのである。神聖なる逡巡。エロスに発し、ロゴスを通過する建築のプロセスに込められるべき意図を象徴する風景だ。こうした逡巡を映した意図は、熟考の果てに到達する意図であって、押しつけがましい主張や表現ではない。あくまでも個人の思惟の徹底の先に出現する意図である。

それはエロスの逸脱とロゴスの統合の緊張を孕むものであった。エロスもまた関係の媒介者であり、ものとものを結びつける力であるが、ただ一つの解答に向かうことをしない。予定調和がない。未知なる未来に向かって分岐と合流を繰り返し、差異を生み出しつづける。いわば差異を包含しつつ総体に流れを生み出し、運動を誘起する力だ。道は一つではない。一方、ロゴスはただ一つの解答に向かう関係の原理であり、つねに同一を保証する。いわば反復可能性を内蔵しつつ、総体に秩序を与え、安定をもたらす力だ。原則として道は一つである。エロスとロゴスの緊張は、したがって、誘惑へと身を任せつつそれへの抗いを潜在させ、決断の快感と同時にそれへの畏怖をも孕んでいる。

建築の設計はそのような矛盾した場にある。そうした行為であり、それだからこそ、人間的なのである。人間的とは、どうしようもなく自身の限界を超越せんとする過剰な意志と野心をもちつつ、葛藤を超えて、行為をなしてしまう、そのようなありようをいう。知と行為は矛盾し続ける[*19]。それが人間という存在の論理である。行為はえてして狂気をはらむ。しかしこれがエロスとロゴスの相克に根ざす限り、それは他者からの声を反映している。ロゴスはそもそも他者からやって来るからだ。およそ他者と無縁の論理は人間の生の論理ではない。単なるナルシシズムに過ぎない。ナルシシズムが他者と感応するエロスに場を譲ったとき、行為への道は展ける[*20]。創造の道は拓かれる。思考は予測を超えて進みだし、未知なる道を切り開かずにいない。

ちなみに意匠とは design に対応する言葉であり、design とは意図をもって方向づけることである。畏怖の念とそして果敢な決断をもって design にあたらねばならない。誰も責任をとらない決定、烏合の衆の合議による決定は、畏怖と果敢な決断とは無縁である。いかなる決定も個人に帰する。人間

*18 萩原朔太郎『青猫』より。

*19 アフォリズムの思想家、シオランはこれを「神秘」と呼んでこう述べる。「自分の知っている一切のことと矛盾する何かを、私たちはやってのけることができる、これが神秘です。ですから、それは一種の冒険、一種の狂気です。」:『シオラン対談集』金井裕訳、法政大学出版局、1998（1995）、p. 94。ヴィトゲンシュタインは「神秘」を尊びつつ沈黙する。＜建築的瞬間＞もまた、こうした位相にある。

*20「人間は他者とのエロス的な関係において初めて生存することができる」のであって、「人間がエロス的な存在となるためには、このナルシシズム的状況から脱出する必要がある」と中山元は「エロスの一般論の試み」（ジークムント・フロイト『エロス論集』中山元編訳、ちくま学芸文庫、pp.397-443）で述べている。フロイトは同書所収の「ナルシシズム入門」で、「人間の心がそもそも、ナルシシズムの境界を乗り越え、リビドーを対象に割り当てるようになる必然性は、どこから生まれるかという問い」を発して、ナルシシズム乗り越えの必然性に触れたあと、「病気にならないためには [他者を] 愛することを始めなければならない」と語り、「病こそは、すべての創造の　衝迫の最後の根拠　創造しつつわたしは癒され　創造しつつ健康になる」というハイネの世界創造の精神についての詩を引いている。(pp.250-251) 人間は「エロス的な存在」とならなければ、リビドーのうっ積を招いて病気となってしまうのだ、とフロイトは分析した。確かに、他者と感応する心を持たない場合、創造行為とは無縁であろう。

社会はあくまでも個人の集合によって成り立っている。もちろん個人の中には他者が介入している。善意や悪意や献身や強欲やもろもろの意図の交錯する場でもある。しかしながら、もともとコミュニケーションは、均質な場に展開されることはまれであって、ほとんどが説得的な世界の提言を果たしうる個人によって誘導されるという性格をもつ。いわば非対称であり非平衡的である。いわばコミュニケーションする身体をもつ個人による決定、これが design である。

未知なる道を切り開く個人は他者によって誘惑され、他者は個人の欲望の余白にあらわれる。その往還の中に偶然と必然が結び合わされる。他者の誘惑は偶然であるかもしれないが、個人へのあらわれは必然である。個人として引き受けた存在は必然である。個人は自らの身に引き受けて決断を行うからだ。到来する未来に自らを賭けるからだ。偶然のただなかに生を授かり、生を営むこの世のすべての事象が、たとえばマラルメがいうように決して「偶然を廃棄」[*21]しないとしても、そこに必然の運動を見定めるのが個人の倫理であり、個のロゴスである。むしろそこに必然を見出す構えの存在を個人と呼ぶ。偶然と必然の往還の只中で、個人の拠って立つ場所と態度は決定されねばならない。それが思想的な課題であり、とりもなおさず建築の課題でもある。知は行為を裏打ちせぬが、思想は行為を裏打ちする。

*21 ステファヌ・マラルメは「骰子一擲いかで偶然を廃棄すべき (UN COUP DE DES JAMAIS N'ABOLIRA LE HASARD)」(『骰子一擲』秋山澄夫訳、思潮社、1984) と記した。マラルメもまた、語の関係を極めつくし、「詩の書物のもつ秩序は書かれる前からきまっていて、いたるところで偶然を排除する」(「詩の危機」南條彰宏訳『筑摩世界文学大系 48』p. 52) と語りながら、「必然」に向かう＜個のロゴス＞を示唆しつつも、ついに廃棄しえぬ「偶然」を＜余白をもつ形式＞へと結晶させたのであった。
ハイデガーはパルメニデスの「思考と存在は同じである」という言葉を問題にして、むしろ「会得と存在は交互に相関的である」と読むべきだとする。前掲書、p. 185。

ロゴスとエロス　4

ハイデガーはパルメニデスの三つの道、すなわち「存在、非存在、仮象」(これは言葉を通して人間が得た可能性の三つの次元であって、すなわち、あること、ないこと、うそ) の三つの現象を通して「存在 einai」を「会得 noein」するという思考に導かれつつ、[*22]「会得」――「会得は明らかにロゴスと連関しており、このロゴスは人間存在の根拠にほかならない」ことをハイデガーは示そうとする――をめぐって次の３つのテーゼに辿りついた。[*23]

1) 会得とは単なる心理過程ではなくて、決定である。
2) 会得は内的にロゴスと本質をともにしている。ロゴスは一つの苦境である。
3) ロゴスは言葉の本質の根拠をなす。ロゴスはそのようなものとして、闘争であり、全体としての存在者のただ中における、人間の歴史的現存在を根拠づける根拠である。

この「会得」をハイデガーは「自発的に一つの特異な道に向かって出発すること」[*24]であると語っている。受動的な了解でなく、能動的な了解である。探り、選び取り、決断することを通しての了解である。スポーツ (たとえばバスケットボール) のたとえでいうなら、ただパスを待つのでなく、パスに向けて動くことだ。

言葉をえた人間は、言葉による思考を通して事物を了解する。ところがその可能性が言葉の性質からおのずと三つに分かれていく。何かが指し示されれば、それがあること (存在) がまず第一の可能性であり、ないこと (非存在) が第二の可能性、そしてうそであること (仮象) が第三の可能性として開かれてくる。このことを不問に付してただ存在をそのままに受け取ること。これは受動的な了解だ。

ハイデガーはそこにとどまっては「会得」には至らない、と考える。この存在と非存在、存在と仮象、というパルメニデスの問題提起を辿りつつ、ハイデガーはまさしく可能性の位相で、さらには行為的な位相で、事物をとらえるのである。そして、「会得」に至るために、道を切り開く思考を暗示する。道を開くのは個々の人間であって、あらかじめ準備された共同体の道徳でもなければ、神の啓示でもなく、社会のイデオロギーでもない。あくまでも個人の探索であって、それが人間の人間である所以である。可能性に向けて思考を投げかけぬものは人間ではない。行為を通して迷い、決断し、思考を鍛えぬものは人間ではない。存在、仮象、非存在、それがそうであるかもしれず、そうでないかもしれず、まったく存在しないかもしれない。世界に対してそのような問いを投げかけないのは、石であり、あるいは動物である。人間は道を、しかも特異な道を、さらには独自の道を、自発的に、つまり神の命令によってでなく、自らの決断をもって、選ばなければならない。仮象の先に、非存在の先に、いや存在のその底に。
事物のありようを、その素材と形を、行為を通して決定しつつ理解する「会得」。相矛盾する諸条件にあえて優先順位を付す苦境としての「会得」。こうした決定によって事物がおさまるべきところにおさまることもあれば、おさまり切らぬ闘争を孕むこともある。そのような「会得」。理論でなく実践の知。この「会得」

*22 ハイデガーはパルメニデスの「思考と存在は同じである」という言葉を問題にして、むしろ「会得と存在は交互に相関的である」と読むべきだとする。前掲書、p. 185。

*23 ハイデガー、前掲書、p. 214。

*24 ハイデガー、前掲書、p. 215。

にロゴスが宿る。いわば「会得」は旅立ちの決意であり、ロゴスは行為をふりかえっての了解である。いわば行為的直観。直観をふりかえれば、論理が宿る。数学を導く美のような直観。このとき直観は経験とトレーニングにうらづけられている。ロゴスは、すなわち不連続な決定の連鎖によって開かれる苦境と闘争の場であり人間の生きる根拠であるとハイデガーによって説明されたロゴスのありようは、もはや観念的な認識の絵解きでなく、むしろ実践のレベルにある。

これはそのまま建築のプロセスに重ね合わされることが可能だ。「会得」は、行為的直観は、建築の現場にあってもロゴスの萌芽であり、このとき個のロゴスは実践のロゴスと相補的である。かくして建築という行為は、「決定・苦境・闘争」の場としての実践のロゴスを通過する道、ハイデガーの思考の道へと導かれていく。*25

＊25 エロスはそのような場にこそ跳梁する。エロスがそのような場、すなわち障害物を必要とすることは、フロイトに即して触れたとおりである。ハイデガーはこうした実践的思考を、言葉の、世界の、存在の、ロゴスの側から説いたのであり、フロイトはこれを心の、個の、無意識の、エロスの側から説こうとした。しかしハイデガー、フロイトともに、無気味なもの、ロゴスとエロスの双方を揺り動かすものについての思考を止めたことはなく、「美」は、あるいは「崇高」は、存在からも、無意識からも、問いかけられる課題であった。

ハイデガーが世界からロゴスを受け止めて、すなわち存在の声を聞いて、「美」や「崇高」を迎える人間存在を考えたとするなら、フロイトは個のエロスの発動を追って、つまり無意識の姿を見いだして、「美」や「崇高」の根源を探った。「会得」において、ロゴスとエロスが出会う。人間はそこで「美」とも「崇高」とも「無気味なもの」とも出会うのである。

意図は、個に胚胎されながら、個別日常的世俗的な課題を「会得」を通して超えようとする。個の意図は共同体の意図を引き受けつつ、用や強を超え、要請を新たなレベルに引き上げる。それが実践のロゴスの、すなわち「決定・苦境・闘争」の、さらなる戦いの場を切り開いてゆく。このとき個の意図はある種の直観に導かれるが、それは決して恣意的に設定されるのではない。超越の使命を身に引き受けながら、社会からの要請を受けながら、ときにそこからのずれとして享楽を味わい、「美」と「崇高」を味わい、「無気味なもの」の到来に出会い、なお個のエロスと実践のロゴスを何らかの形で整合させようとする。個の決断は、その底に苦境を湛え、神聖なる逡巡、闘争の現場を通過している。この決断の連続の果てに、意図は見出され、享楽もまたそこに見出されるのである。享楽は「美」と「崇高」と「無気味なもの」に出会う経験でもある。

ヴィトゲンシュタインはこのような言葉を残している。*26

＊26 ルードウィッヒ・ヴィトゲンシュタイン『反哲学的断章』丘澤静也訳、青土社、1981(1977)、p. 64。ヴィトゲンシュタインは建築に造詣が深かったから、面白い発言を多々残している。たとえば「すぐれた建築家とだめな建築家は、今日、どのように区別されるか。だめな建築家は、どんな誘惑にも負けてしまうが、まともな建築家は、誘惑には負けない」。誘惑される精神は重要だが、抵抗の形式をもってタナトスを見据える志が必要であることを示唆している。エロスに抵抗を対峙させること。

> *よい建築から受ける印象とは、「その建築が何かひとつの思想を表現している」ということである。このことを、おぼえておけ。また、よい建築には、何か身ぶりでもって反応したくもなるものだ。*

この言葉は同じことを異なった側面から述べたものだ。思想とは個人の態度である。したがって「何かひとつの思想を表現している」とは、ある個人的な意図を持っているということである。また、個によって磨きぬかれた身体的な運動感覚の込められた建築に、つまり個の意図の漲る建築に、「身ぶり」は反応する。「美」も「崇高」も身体感覚に宿るからである。*27

＊27 ヴィトゲンシュタインは、世界の限界を言葉の限界と関係づけ、語り得ぬことについては沈黙を強いた。『論理哲学論考』（藤本隆志・坂井秀寿訳、法政大学出版会、1968）における最後の命題のように。しかしその底に「神秘」をおいて、フロイトのいう無意識を暗示したとも読める。ヴィトゲンシュタインは、芸術的感性の持ち主であっただけに、「美」や「崇高」をあえて「神秘」の領域にくくった。

思想とはロゴスである。それが行為の根拠であるからである。「身ぶり」とはエロスである。それが誘惑と決断をあらわす個の身体的反応であるからである。エロスとロゴスが個において出会う。すでに見たように、ロゴスは存在の声である。エロスはこうした存在の声への人間の身体的な応答である。ロゴスは自然に埋蔵されている。エロスは自然に意味を見出す人間の身体に発して世界へと出かけていき、ロゴスはこれを意識に明快な形として定着する。エロスはそもそも自然としての身体に埋め込まれた自由の可能性であり、ロゴスは人間が自然に投げかけた世界の了解の形である。

B．真理への意志

> *もしも、真実がたった一つなら、誰が同じテーマで百の絵を描こうか？　　パブロ・ピカソ*＊28

1　建築の「救い」

建築の設計は逡巡に満ちながらも、個々の与件とその解決に優先順位をつけるという、決断の連続としてとらえられる。そこに理論が召喚される。言葉が召喚される。ロゴスが召喚される。理性と体系の建築術が召喚される。その場に現にあるものでなく、そこにないものを到来させようとする試みであるから、いわば当然のことだ。非存在と仮象、すなわち無と虚構を、つまり言葉によって開かれた可能性の領域を、そこに到来させようというのであるから。

＊28 ピカソ「ピカソのことばとピカソ素描」坂崎乙郎訳『現代世界美術全集 14 ピカソ』集英社、1972，p.107。

理論は、存在を圧縮し整理してそこに秩序を見出すという、人類の頭脳の働きに導かれて成立する。「悟性は単純を好む」のである。頭脳のこの性質が、人類の文明展開の原動力となった。つまり理論は本来的に現実世界の圧縮の試みであって、つまり仮説であるという性格をもつ。とりわけ建築の場合、仮説にとどまる。この点で、ただ一つの解答から外れてメタフォアとメトニミーの隘路に迷い込んでしまう性格を持つ言葉は、建築設計の現場にある意味で似つかわしいのかもしれない。
建築の理論はすべて仮説に過ぎない、と述べた。しかしながら、いやだからこそ、無限の可能性に向かって開かれているといっていい。ここに自在な構想力の介在する余地もあるし、エロスの跳梁を許し、新しい経験や感覚を取り入れる感受性のみずみずしさもまた保存される。仮説はあくまでも豊かなものの世界を開く扉であるのであって、しかも扉は開かれるためにある。ひたすら扉を磨いていては、豊かな世界は永遠に向こう側だ。

したがって仮説は無限にある。建築におけるただ一つの理論など、ない。この点から言えば、建築という分野における「救い」は、フーコーが問い続けた「真理への意志」[*29]すなわち排除のシステムに汚されていないことにある。「真理への意志」は正義のための大義名分のようなものであって、ときに集団の暴力を許容する。これを振りまわすのは決まって「権力」の側であり、あるいはこれに無自覚な追随者であるから、このシステムは「権力」にお墨付きを与える。たとえば、アルチュセールの言う「国家のイデオロギー装置」、すなわち教育、出版、図書館、研究所、を「真理への意志」は貫いている[*30]。各々の社会が容認し、推進するプログラムは、えてして「真理への意志」の装いを凝らしているものであって、そこには分割と検閲の意図が潜んでいる。

この集団の暴力から逸脱しうるのは、実に建築という行為を通してである。というと意外に思えるかもしれない。「権力」との蜜月を通してのみ建築は実現の道を辿るという一般的な了解があるからだ。ところが建築の現場、すなわち建築行為のさなかにおける思考のありようは、建築物に付着されようとする大義名分をいともたやすく裏切る構造をもっている。建築という行為につねにつきまとう個の享楽と自由が、逸脱の道を切り開いてしまうからである。そしてまた建築がなめらかな論理に則って進むのでなく、立ち戻り突き進み錯綜し混乱ともいえる事態に立ち至り、そのプロセスのさなか、ある時点においてこの理不尽ともいえる事態の「切断」がおこなわれる。この「切断」という他者との出会い、他者性の認識によって、イデオロギーから外に出る行為だからである。建築行為が集団の匿名性に解消されない自立した個の行為である限り、ともすれば「権力」に寄り添いがちな建築という表現形態には「救い」がある。自立した個こそが集団の暴力から逃走する道を描き出すからであり、個としての表現行為はつねに集団からの逸脱を孕むからである。建築が本来的に個人の営みである限り、それは自由にさしむけられ、自由に支えられている。

「権力」と建築の関係、とりわけ建築表現との関係は、単純に解くことのできない結び目を形成している。たとえばナショナリズムの表現とされた帝冠様式も、「所謂日本趣味」という言葉が当時すでに底意を込めてささやかれ、確たる様式と呼ぶにはあまりにパロディー的であって、体制側の強権発動もなく、むしろ一般大衆や一部識者の「権力」へのおもねりから出た、いわば時代の風潮が生んだ流行であった[*31]。イタリアやドイツのファシズムが選び取った様式も、かたやモダニズム、かたや古典、とまったく正反対のものであって、これもまた言ってみれば、支配者の趣味の反映である。しかも時代のモードというものは、いつの時代にも、ある。歴史を語ろうとすればついこれをえてして「権力」と絡めたくなるきらいがある。ただ「権力」と建築表現との関係は、一言でいうなら、恣意的である。クライアントの趣味に無関心でいられないのと同じ程度に、時代の流行と無関係でいられないのと同じ程度に、時代の生産手段と無関係でいられないのと同じ程度に、時の「権力」の動向に思いを馳せる表現者も生息するというだけである。集団の暴力に対して建築的想像力は、いわばねじれの位置を走っている。つまり交点をもたない。建築的想像力には建築的想像力の論理と倫理と志向性があるのであって、権力と交点をもつかどうかはむしろ時代の偶然的な諸々の要因によるのである。

さらに言えば、これら「国家のイデオロギー装置」はどちらかといえば建築のプログラムの問題で

＊29 フーコーの展開した権力分析の出発地点として、コレージュ・ド・フランスの就任講演(1970)を挙げる桜井哲夫は、『フーコー/知と権力』(講談社、1996)の中で、この「真理への意志」を「真実なる言葉と虚偽の言葉を分けるシステム」とし、「こうした『真理への意志』というシステムこそが、社会のなかで、人々が織り成す言論に最も圧力をかけ、拘束の権力として機能するものだ」と述べている。(p.210)

＊30 この世界は一人の思想家にとっては、とりもなおさず、彼の時代に生きるさまざまの思想の世界であり、彼がそこで思考をはじめるイデオロギーの世界である。」:ルイ・アルチュセール『マルクスのために』河野健二他訳、平凡社、1994(1965)、p. 114。アルチュセールはまた、いわゆる「認識論上の切断」以前のマルクスについて適用さるべき原理が、「何かについての真理ではなく、何かのための真理である」と述べている。同書、p. 96。マルクスは自分自身の内に閉じたイデオロギーから「切断」によって外に出る。「切断」とは他者性の認識である。

＊31 井上章一が、日本趣味建築の勃興について、少なくともそれが世間一般に喧伝されているようなファシズム国家様式でなく、むしろ大衆や一部識者(とりわけ保守的な年配のそれ)が体制に良かれと推進した流行であったことを詳しく論じている。:『アート・キッチュ・ジャパネスク』青土社、1887、特に pp. 38 − 52。

ある。つまり建築の問題でなく制度の問題である。建築の本来的な課題は、実は空間的な解決を提出することに過ぎない。この意味で建築は社会的に没イデオロギー的である。「権力」と連動するが運用と関わらない。制度を強化することも可能であるし、これを無化することも、場合によっては可能である。神の建築と人間の建築、生者と建築と死者の建築、富者の建築と貧者の建築、宮殿と獄舎、独裁者の建築と奴隷の建築、修行者の建築と娯楽の建築、それぞれいずれが重要な課題であるか、という問いは、こうして並べただけでもいかにも不毛であろう。建築にとって、プログラムが中心的な課題となることは、原理的にありえないのである。

つまるところ、建築は、ひとえに空間的な価値とのみ関わっている。しかもその価値の在り方が無限にある。歴史的に見ても、空間の価値は制度を超える。パルテノンはギリシアの神々を知らぬ身にも美しさは感得され、パンテオンは機能を失っても空間の響きは失せず、ハギアソフィアは宗教を超えて聖なる空間として崇められる。

建築の真理は一つではない。一つであることをあくまでも真理と呼ぶなら、建築に真理はない。真理は存在と思考が一致するところに成立するのであって、建築的思考にあっては、存在が思考からはみ出るからだ。存在が思考を逃れ去るからだ。思考に無限の可能性があるからだ。それが証拠に、世界中の建築学校で行われる設計演習は、延々と異なる解、特異点、特殊解、を生み出し続けている。無限の解に開かれた存在の呼びかけに呼応して生命体は反応する。その読み取りと態度決定を自主性、主体性と呼びうるなら、個別の「真理」がそのそれぞれに対応する。これが建築という分野を健全なものにしている。建築に「救い」をもたらしている。「権力」に結びついて建築された建築物も、結びつかずに立たなかった建築も、空間的価値という判定の前で平等である。たとえ時代の「教義」といえどもつねに覆される運命にある。建築の歴史がこのことを教えてくれる。正しい建築などない。しかしつねに、正しい建築が求めつづけられることもまた確かなのである。

2　決断の構造

かくして、「真理への意志」[*32]とは離れた位相で、決断はなされていく。決断の根拠は、必ずしも合理的なものでもなく、普遍的なものでもない。優先順位のつけ方を変えれば、また別の解決が出てくるだろう。いかにも非合理的に思える決断も現れる。

建築は自然の原理に従う。建築の立ちあがる中に潜むはずの合理、すなわち自然の中に潜む原理の反映、これが判断を導く。決断を導く。ところがこの合理であろうとする中にすら非合理が立ち現れる。決断の構造には必然的に非合理が介入するからである。

人間の感覚や認識の中には合理とは相容れない感情があり、建築によって現象する空間は人間の感情とも交信すべく宿命づけられているから、決断は自然の面からも人間の感情の面からも、なされてしかるべきであろう。そこで、自然の論理とは独立の、空間の論理もまた自らを主張する。
たとえば天空への憧れ。より高く、よりのびやかに、より透明に、より軽やかに、等々、ときに自然の重力に逆らう試みが、自由を実感する契機ともなる。12世紀サン・ドニ修道院長シュジェールの構想に端を発するゴシック建築を想起してみよう。優先順位のつけ方に矛盾が起きれば破綻すら発生しかねない。それはしかし、希望を高く持つがゆえのリスクであって、みごとな構造的解決がもたらされれば、そこにまた感動も惹き起こされるのである。

決断の構造について丸山眞男はこう語っている。

> *どのような歴史法則も、どんなに精密な現状分析も、行動に向かって決断する立場に立った人間にたいして、完全に計測可能な形で次に来るものをさし示すことはできない。理論はいかに「具体的」な理論でも一般的＝概括的性格をもつからして、理論と個別的状況との間にはつねにギャップがあり、このギャップをとびこえる最後のところにはまさに「絶体絶命」の決断しか残されていない。*[*33]

建築する人間はつねに「行動に向かって決断する人間」である。決断をうながす建築設計の現場は、不確定な与件に満ち満ちている。つまり具体的な諸条件がすべて異なる建築設計の現場においては、

*32 ニーチェは「ツァラツストラ」の中で、この言葉をこう定義している。「君たち、最高の賢者たちよ。君たちは君たちを推し進め、熱中させているものを、『真理への意志』と呼んでいるのか。一切の存在者を思考しうるものにしようとする意志、わたしは君たちの意志をそう呼ぶ」『ニーチェ』手塚富雄訳、中央公論社、1978、pp. 187-188。ニーチェは続く著作『善悪の彼岸』の第一章「哲学者の偏見について」冒頭を、「真理への意志」という言葉からはじめている。

*33 丸山眞男『日本の思想』岩波新書、1961、p. 93。

一般的な理論は成立しない。多くの予測は裏切られ、新たな対処を求められる。いわば現場の知が求められる。相手が自然ならまだ予測もつこうが、相手は自然のみならず社会であり、つまりは人間であるから、計測可能な形はほとんど期待できない。個別的状況の積み重ねと絡み合いが建築という行為を取り巻いている。まさしく建築の設計という行為はこの「絶体絶命」の決断の連続であり、またどこまで「絶体絶命」の淵にまで自らを追い込めるかに、その行為の価値も成果もかかっているのである。「絶体絶命」から遠く離れて張り渡したロープの安全側に逃げ込んだ決断は、凡百の凡庸な建築物を生産してゆくのみ。個の享楽とも無縁である。

また決断は必ずしも合理に貫かれたものでもない。合理のみの決断はえてして貧しい。人間の行為がすべて合理で説明できないことは、ヘーゲルの夢見た理性の国家建設の失敗が証明していよう。遊び、祈り、逸脱、逡巡、喜び、すなわちエロスの声の響かぬ決断は貧しい。理論から逸脱し、思考からはみ出る存在の中に、象徴的秩序の裂け目の中に、空無の主体の中に、エロスの声は高らかに響き渡る。

理性的、合法則的なものをどこまでも追求して行く根源の精神的エネルギーはかえってむしろ非合理的なものである。 *34 *34 丸山眞男、前掲書、p. 116

科学の世界と芸術の世界を、ただ一方を不変的・法則的・概念性において、他方を個体性・非合理性・直観性において規定するだけでは、両者はただソッポを向き合うだけにおわってしまう。 *35 *35 丸山眞男、前掲書、p. 116

エロスの運動のさなかにロゴスを見定め、ここを通過する。人間の創造行為について真摯に理論の問題を問えば、こうした逡巡する意匠の言葉がいくつでも出てくることだろう。存在はいつも思考からはみ出している。しかしわれわれはそのことを思考することによって知るのである。思考が存在に漸近する。存在が逸脱する思考の運動に寄り添う。エロスとロゴスは縒り合わされた糸のように、創造行為を導いていく。

どのようにしてこの世界に投げ出されており、どのようにしてこの世界を改変することが許され、どのようにして世界の秘密をわれわれは感じ取ることができるのか。これが建築の底を流れ続けた、世界に対する基本的な問いかけである。建築は古来、人工的なものの加工によって世界を象徴的に生み出す実験装置であった。ものを組み立てるという行為を通して合理の力を会得し、その先にある必ずしも合理で割り切れぬ世界を合理の装置に投影した。自然の力をフィルターにかける装置を通して、世界の姿を垣間見ようとした。フィルターに濾された光や音や風や香りや匂いを世界の似姿に組み立てなおした。

自然の合理と意識の非合理が合従し、衝突し、融合して、決定はついになされる。会得と苦境と闘争の果てになされる。ただ決断の構造には個人の自由と恣意が介入する。建築という行為の現場は、人間の原理と自然の原理の交錯の中、合理に非合理が介入し、世界を豊かに意味づけるための、未知なるファクターの組み合わせのゲームに満ちている。

存在は思考をはみ出る。思考が言語を通してなされるとして、それでは言語が合理であるから存在は言語をはみ出るのだろうか。いやむしろ言語自体が思考をはみ出る存在を誘導し、ほとばしらせる非合理を内蔵しているのではないのか。言語と建築はその根っこのところで非合理の決断を共有しているのではないのか。合理を突き詰めた果てにその裂け目から立ち現れる非合理。それではその非合理の根っこは、いったいどこに根ざしているというのだろうか。

C．アンチ・バベル

言語と建築　*1*

言語と建築を巡る著名な寓話であるバベルの塔のエピソードについて、少しく考察を加えてみよう。そこにもまた「真理への意志」の建築的な原初の声の響きが木霊しているからである。

永遠の存在と神の領域をめざした人類は、心をひとつにして、つまり言葉をひとつにして、天にも達

する塔の建設をはじめた。人々の心を占めていた大問題は何だったのだろうか。死がそれである、と考えることはできないだろうか。バベルの塔の建設には、少なくとも死というロゴス／言葉が必要だった、と。

バベルは「神の門」である。人間はなぜ天をめざし神をめざしたのか。それは死への抗いではなかったか。言葉を知った人間が、不在と虚構の可能性を知り、自らの死の可能性を自覚して、永遠の存在に憧れ悠久を想うようになった。死すべき有限の存在の人間たちが、死を乗り越えて永遠へと到達する。これがバベルの塔建設の主要なモティベーションだったのではないだろうか。死の訪れを永遠に引き延ばす物質的な道行きがありうるなら、そこに死を乗り越えて永遠の生命を獲得する契機もまた出現する。有限の現世に永遠の形式が見出せるなら、有限の存在にも永遠が与えられる。こう考えたのではないか。

古代メソポタミアの叙事詩、ギルガメシュの物語[*36]、その最後のモチーフを想起してみよう。それがまさしく、死を乗り越えることだったことを。ギルガメシュは不死を求める旅に出て、ついに果たせず帰還し、永遠を祈って建築する。物語の最後の場面である。その煉瓦を吟味し面積を確認するという行為は、物語のはじまりに現れた描写のリフレインであり、一字一句違わない。あたかも物語が再び振り出しに戻り、語りはじめられるような構成をとっている。ギルガメシュにとって建築は死の乗り越えの代替行為であり、また再生の祈りを込めた行為でもあった。これがはじまりの建築をめぐる思考の風景であったろう。

＊36 物語は、R.S. クルーガー『ギルガメシュの探求』氏原寛監訳、人文書院、および『ギルガメシュ叙事詩』月本昭男訳、岩波書店によった。

可能性としての永遠。引き延ばされた死の訪れ。無と虚構をめぐる思惟。まさしく言葉が建築を要請した。そして言葉のもたらす欠如が欲望を惹き起こし、欲望が行為を要求した。この行為こそが建築であった。建築を招来したのはロゴス／言葉であった。ロゴスのもたらす欠如がエロスを惹き起こし、エロスが建築を要求した。建築はロゴスに導かれ、やがてエロスはタナトスという究極のエロスに、反転する。死という永遠の形式に収束する。

言葉に導かれつつ、人は想いを形にする。思考の運動を空間として表現しようとする。この行為が建築である。建築を通して人は世界に明快な形を与えようとしたのだった。建築が来るべき世界観を表現する。建築には力がある。有無を言わせぬ強さがある。いったん表現されてしまえば、それは物質化されたロゴスであって、万人の目に触れ、実体として触ることもできるから、おそらくは百万の言葉よりも説得力豊かに新しい世界観を表現したはずである。

バベルの塔のエピソードは、建築の出現の事情をよく物語っている。建築することによって人類は自らの言語を鍛えたのだ。物を構想し、つくりあげるという行為のさなかに、ひとつの言葉が建築を誘導した。と同時に、いやそれよりも大きな力で、建築が言語をも誘導したことだろう。建築は実現のプロセスの中で、そしてその空間としての現象の中で、観念との一体化を果たしたことだろう。このとき、死への畏れと死の形象化を通した永遠の希求とは表裏の関係にあったはずだ。

非合理は死に臨む人間の囁きと祈りに発している。建築という行為は、遠い、さらにはありえない場所の構想を、それへの憧れを、その根底の部分に抱え込んでいる。死は、畏れであり憧れでもあった。建築をぎりぎりのところまで還元するなら、それは人類の畏れや憧れの形象化そのものとすらいっていいだろう。タナトスへの反転。バベルの塔は建築の持つ時間の凍結、具体的には死の結晶化という側面、すなわちモニュメントへの志向性をよく表している。

にもかかわらず、バベルの塔の建設は失敗した、その経験こそが建築を可能にしたのだ、とジャック・デリダは述べている。それは一言でいえばこういうことだ。建築がひとつの言葉によって開かれることも確かであるが、言語が分裂すれば言語の数だけ建築の可能性もまた存在するはずである。建築を可能にした、という言葉が意味するのは、＜唯一の建築＞の建設失敗が、＜さまざまな建築＞の可能性を開いた、ということだ。バベルの失敗こそがその後の建築的構想の可能性を開いた。建築に自由をもたらした。建築的思考を通して人類の思考に自由をもたらした。そして複数の建築の展開と相互の影響関係を生み出したのであり、ひいては建築の歴史を可能にした。

マラルメもまた、ヴェルレーヌ宛の書簡において、ずっと夢見てきたものをこのように語っている。*37

> *一つの書物であるような一つの書物。つまり建築的な、予め熟考された書物であって、いかに霊感が驚嘆すべきものであったとしても偶然によるしかじかの霊感を一纏めにしたものでは断じてない・・・。さらに突込んで言うならば、それを書いた誰彼によって、いや諸々の「天才」たちによってとさえ言ってよい、彼自身の知らぬ間に試みられた、真実ただ一つしか存在せぬと確信される「書物」そのものである。*

*37 ステファヌ・マラルメ「自叙伝／ヴェルレーヌ宛の手紙／1885.11.16」松室三郎訳『筑摩世界文学大系48』p. 57

しかしながら、こうしたバベル的書物を憧れながらも、逆にそうした言語の限界、その歯がゆさこそが詩句を生み出すのだ、とマラルメは述べる。*38

> *人間の言語は、種類が二つ以上あるという点で不完全である。つまり、最高絶対の言語というものは存在しない。元来、考えるということは、道具も使わず、頭の中でつぶやいたりもせずに、いまだ沈黙の状態にある不死の言語を書くことだから、もしこの地上に雑多な国語しか存在しないということになれば、思想の真実そのものを、語としてひと打ちに打ち出すことは、人間の口には不可能になる。この禁止事項は、人間が自分を神とみなさないように、自然の法則にはっきりと書き込まれている。（われわれは諦めの微笑を浮かべながら、自然の命令に従うほかないのである。）*

*38 ステファヌ・マラルメ「詩の危機」、前掲書、p. 50

この不完全への諦めが、まさにバベルの物語と重なり合わないだろうか。マラルメはこのように言語の複数性を嘆き、続けて語感と意味とのずれを嘆きつつも、もし完全な言語、語感と意味も一致した言語があったならば、

> *そのときは詩句など存在しなくなるであろう。なぜなら、詩句は、言語の高級な補足として、その欠陥を哲学的に補う役目をもつものだから。*

と書きつけるのである。抵抗が形式を磨き上げる。言語の不完全であることこそが、そしてまた建築の不完全であることこそが、言語を、建築を可能にしている。

建築も言語も「共に在る」ことの表現である。人と人との出会いの形を誘導する。ひとつの言葉は多数のイメージを喚起しもする。言葉が分化し、誤解を生み、ずれていくように、イメージは無数の可能性を孕んでいる。あるときひとつの言葉の喚起力が<唯一の建築>を誘導したのも確かならば、ひとつの言語に限られないところに<さまざまな建築>が生まれ、さまざまな出会いの経験がはぐくまれて相互作用が起きもした。そこに人類の建築のさまざまな歴史の展開が可能になった理由もあり、その原動力があったことも確かなのである。唯一の価値へ向かう「真理への意志」は建築を強めもし、滅ぼしもする。

無限の可能性を孕む思考　2

建築の解が無限であることは果たして建築の無秩序を意味するのだろうか。

バベルの塔の象徴的な意味について、ジャック・デリダはこう語っている。*39

> *もし塔が完成していたなら、建築は存在しなかったでしょう。塔が未完に終わったからこそ、建築も、多様な言語も、歴史をもつことが可能となったのです。*

*39 Jacques Derrida 'Architecture Where Desire May Live', interview with Eva Meyer, "Domus",vol.671,1986,pp.17-25。
本節の論考はすべてこのインタヴューにおけるデリダの発言に基づいている。巻末に参考資料として拙訳を収録する。なおこのインタヴューは以下のアンソロジーにも収められている。"THEORIZING A NEW AGENDA FOR ARCHITECTURE", edited by Kate Nesbitt, Princeton Architectural Press, New York, 1996, pp.144-149。および、"RETHINKING ARCHITECTURE", edited by Neil Leach, Routledge, London and New York, 1997, pp.319-323

ところでバベルとは何か。*40 それは神の発した言葉であり、混乱を、すなわち言語の混乱を、そして理解し合えぬ異質の他者たちが共存する状態を指しているといっていいだろう。その名はそのまま、都市発生の地メソポタミアでもっとも隆盛を極め、悪徳の栄えた強大な古代都市、バビロンを暗示してもいる。

いったいバベルの失敗がどうして建築を可能にしたと言うのだろうか。

デリダはバベルの塔に触れつつこうも述べている。セムという「名前」を意味する名をもつ語族の民が、自分たちで世界を命名するために空に届く塔を建てようとした。世界を見晴るかす空の高み、この命名行為、名前というものに秘められた潜在力、メタ言語というものの高みを通して、かれらは他の部族、他の言語を支配しようとしたのだ、と。

命名は世界を分割し、所有する手段である。名づけることによって、世界は意味の連鎖の中に取り込まれる。位置づけられ、交換される部分の集合になる。

*40 デリダ『他者の言語』pp. 1-14 にバベルをめぐる考察がある。

しかしついに神が降臨し、バベル、すなわち混乱という一言を発することによって、かれらの野望をくじく。この一言が人類を言語多様性の世界に赴かせたのだった。かくして人類は普遍言語による統治計画を断念した。唯一絶対の世界観などというものが不可能であることを知ったのである。建築はつねにラビリンスにとどまり続ける。それは超越的な視点からではなく、むしろ無限に多様な視点から世界を眺めうることを意味している。

そこでかれは結論するのである。「もし塔が完成していたなら、建築は存在しなかったでしょう」と。ここで「建築」を「無限の可能性を孕む思考」と読み替えてもいい。かれはさらに「塔が未完に終わったからこそ、建築も、多様な言語も、歴史をもつことが可能となったのだ」と続ける。つまり、建築が、あるいは言語が、宿命的に孕みつづけている未完性、有限性、差異性こそが、その無限の可能性を、数限りなく続く試みが試みがいのある試みであることを保証している。ロゴスはエロスの乱舞を導く。しかしエロスはやがてタナトスへと向かう。そしてくぐり抜けそこね、弾け散る。永遠のモニュメントこそが廃虚である。そんな逆説的とでも言えるような関係を、このアンチ・バベルのメッセージから読み取ることができる。

バベルの塔の崩壊は、無限の可能性に向けて歩み出す建築の歴史の、象徴的なはじまりであった。

3　道を切り開く思考

ところで、建築について、というより、むしろ建築という思考の可能性について、デリダはこのように自身の考えを語っている。

かれによれば、建築はつねに、道を切り開きつつある思考そのものである。それは、途上にあり、内在的であり、理論と実践に分かちえず、「建築的瞬間、欲望、創造に属する未知なる思考の道」なのである。

「建築的瞬間（architectural moment）」とは魅力的な言辞だ。建築と思考がそこで架橋される。
デリダは続けて、決してそれは思考の空間的、物質的表現の技術などではない、と強調してもいる。つまり、何か表現されるべき思想があって、その思想を翻案したものなどではない、思考の可能性そのものだ、と言うのである。

建築とは思考の可能性そのものだ。これはどういうことか。

たとえば、哲学はこれまで多くの建築的なメタフォアを用いてきた。デリダはデカルトやアリストテレスを例にとる。ただそれは、デリダに言わせれば、建築的思考というより単に建築をメタフォアとして使ったにすぎない。哲学は言語によってなされる。ところが言語自身は建築性をもたない。目に見えるわかりやすい構造を持たない。だからこそ、思考を視覚化、空間化する手助けとして、建築的メタフォアが有効であった。ロゴスは建築を志向するのである。

さて、とはいうものの、あらゆる言語は空間や空間配列を暗示している。言葉は空間を開くのである。その空間、すなわち言語によって喚起される空間や空間配列は、言語を支配しているというよりは、かれの言い方を借りるなら、「漸近的に言語に近づいていく」。この「漸近的接近は未踏の地の探索や径路を拓くという行為」は「径路を創り出すという行為」であって、建築と無縁でない。
そこで、もし理論と実践の分離以前に、あるいは「思考」と「建築」の分離以前に、建築的出来事に密接に結びついた思考方法が存在していたとするなら、それは一種の開拓、道を切り開くと言う行為に比肩しうるものであったろう、とデリダは言う。しかもそれは、あらかじめどこかに真理のような用意された解答があって、その発見が待たれている道などでなく、新たに切り開かれ、創造されるべき道として、存在する。それはエロスの運動そのものだ。

それはいつも途上にあって、ハイデガーの言葉を引くなら「言語に向かう動気の中にある」、建築はそうした道にほかならない。言語はもとより空間構造の中に織り込まれて在る。言い換えるなら、建築は言語に向かって動く道であり、言語は建築に織り込まれて発現を待っている。エロスはロゴスに向かって動く道であり、ロゴスはエロスに織り込まれて発現を待っている。

デリダは、建築と言語の関係をこのように捉えている。もちろんデリダは言語の人だが、かれはと

りわけ空間化された、目に見えるものを問題にする。目に見える痕跡、エクリチュール、そこに意味の重なりとずれと屈折とを見出す。目に見えないものの奥行きを孕んだ、いわば空間化された言語である。だからかれは建築という空間加工のイメージ、想像力の運動形態に注目するのである。

さらにかれは重ねてハイデガーを引きながら、「思考はつねにひとつの道である」ことを強調していく。ただしそれは odos（道）であって、決して meta-odos=methodos（道の上に、後に、来るもの＝方法）ではない。デリダによれば、思考が方法 methodos の問題として定義されるのは、デカルト、ライプニッツ、ヘーゲルに代表されるほんの一時代のことであった。実は思考はつねに道でありつづけており、この「道である」ということが思考の無限を、つまり思考が無限の可能性にむけて開かれていることを示しているのだ、と言うのである。すなわち思考はテクニックでなくプロセスである。目的をもった運動ではなく、目的を求めて逡巡しつつ決断する運動である。デリダはおそらくハイデガーのこうした思考の「道」を受け継いでいる。ハイデガーはすでに以下のように述べている。

> *『存在と時間』は一つの道ではありますが、「唯一の」道ではありません。哲学にはそうした道などけっしてないからです。*[*41]

[*41] ハイデガー『シェリング講義』p. 145

デリダの思考を巡る思考をさらに辿ってみよう。かれはほとんど自身の思考を、建築的思考とかれが定義しようとするものに同調させようとしているようにすら見える。思考は決して道の遥か上部で展開される超越的なシステムではなくて、道とともにある、内在的な、いわばつねに道を歩みつつおこなわれる行為なのである。もっと正確に言えば、道を歩むこと、切り開くこと、そのことが思考に他ならない。したがって、道を切り開くこととしての思考は、その道に住み込むこと、空間に住み込むこと、であって、いわば居住性と、建築と関わっている。

何か確定した答えがあって、それに向けて目的をもって進んでいく、単一で、均質な解答に対して、デリダは悪意に近いものすら抱いているようだ。だから建築を思考の運動のありようとして、逡巡と決断の交錯する思考の形態として、とても身近に感じてもいるのだろう。語るにつれて、ますます建築との関わりは深くなってくる。出口の定まらぬ道に住み込みつつ動きつづけること。これが建築的思考であり、思考本来の姿であり、今日忘れ去られている思考の未知の可能性なのだ、とすらデリダは言うのである。

[*42] デリダ『他者の言語』p.223

かれはここで、インタヴュアーの勇み足にうながされ、これを制しもしながら、ラビリンスという建築的メタフォアにあえて触れる。ラビリンスは無意識のメタフォアだ。そこにエロスが、そしてタナトスが住み込んでいる。「私が書くのは誘惑するためです」と断言するように[*42]。デリダにとって書くこと、つまりエクリチュールとは、まさにはじめも終わりもないラビリンスのようなものだ。書くことが生きることであり、住み込むべき道なのである。デリダはジョイスのダイダロス[*43]にも言及する。もちろんギリシア神話のダイダロスを暗示してのことだ。クレタのラビリンスを築いたダイダロスは、アテネを追われた建築家であった[*44]。かれは女王と牡牛のあいだにできた子、怪物ミノタウロス誕生の共犯者として、また王の娘アリアドネに糸玉の知恵を授けテセウスとの駆け落ちを助けたものとして、自ら築いた迷宮に幽閉され、いわば住み込まざるをえなかったのであった。自らの知と技術に溺れ、道を誤る者。神話の中の建築家にはこのような含意もある。そしてそうしたリスクすらいとわず、その居住性と創造性に惹きつけられて、デリダは道に住み込む思考の形を求め続けるのである。

[*43] James Joyce, 'A Portrait of the Artist as a Young Man' の主人公の名が、そして『ユリシーズ』のスティーヴン・ディーダラス、すなわち「この物語におけるテレマコスであり、若きジョイス自身の肖像――父親から疎外されながらも、誇りと大志を抱き続ける貧乏文士」：デイヴィッド・ロッジ『小説の技巧』柴田元幸・斎藤兆史訳、白水社、1997(1992)、p. 72 の名が、ギリシア神話に即して読めば、ダイダロスである。

[*44] 建築家の祖型。嫉妬深く、功名心に燃え、高い技術とあらゆる知識を有し、目的の善悪に頓着せずこれを用いたために、自ら築いた脱出不能の迷宮に幽閉され、自ら考案した翼によって息子のイカロスを失った。

建築的思考の位相　4

デリダは建築を、建築的出来事、つまり空間の中に場所を占めること、taking place、起こること、出現させること、あらかじめ存在しなかった何かを創案すること、と捉えている。つまり創造的行為として、さらにいうなら動詞として捉えている。このことは建築という言葉にとって、いかにも実り多い解釈だといえるだろう。「それはまったく自然発生的ではありません。居住地を組み上げる、というのは出来事なのです」。すなわち出来事としての建築。「そこには自然発生的なものでも人工的なものでもない迷路がある」。とりもなおさず、それは自然と人工の間のラビリンス、われわれが住み込みつつ動きつづける道、この世界の経験である。すなわち意識と無意識にわたる経験である。この

場所に住み込み踏みとどまることが、デリダにとっては、たとえば古代ギリシア以来西洋思想が自明のものとし、またそのゆえに思考を抑圧もしてきた「自然と技術、神と人、哲学と建築」といった二項対立の手前に立つことであり、まさにかれの「脱構築」を通して、これまでの思考を制限してきた対立から自由になろうとする道であった。パロールとエクリチュールの対立の手前に、同一と差異の対立の手前に、出来事としての建築は、すなわち行為としての建築は、自由への道として、思考の可能性として、置きなおされた。建設と破壊の手前に、生と死の手前に、屹立する、あるいは運動する新しい思考の形として、デリダによって位置を与えられたのである。思考がもはや超越的ロゴスとしてでなく、いわばエロスとタナトスを孕むロゴスとして、内在的ロゴスとして。これを指してかれは建築的思考と名づけたのだった。

だからこそかれは「脱構築」が単なる建築的メタフォアとして、つまり解体と同様のイメージとして捉えられ、あたかも否定的、破壊的に受け止められることに当惑している[*45]。脱構築とはむしろ構築のシステムを、その成立根拠や脆さを見極めることである。理論というものに内在する「特定の体系的予断」を明るみに出し、構築性を支えている靭帯にメスを入れることであって、構築という人間が事物を組み立てる行為を否定するものではさらされない。

むしろ逆に、「構築のアイディアを自ら構想しうるようになったとき、脱構築は単なる構築の反転などといったテクニックを抜け出す」のであり、だからこそ「脱構築ほど建築的なものはなく、また建築的でないものもない」とデリダは語っている。前者の「建築」が内在的ロゴスを意味し、後者の「建築」が超越的ロゴスを意味するのは言うまでもない[*46]。

「書くこと、それは空間的な行為であって、進んでいく道に沿って考えること、どこに導かれるか知らぬままに、痕跡を残しつつ道を切り開くことだ」、とデリダは説明する。デリダにとって、書くとは、いわば時間と空間が一体化された出来事であって、建築的思考そのもの、すなわち思考を逃れ去る存在を、なお思考を通して追いかける試みだ。だからこそ、デリダは思考の可能性として建築を問うのである。

このような道を切り開く行為として、思考を、書くことを、建築することをとらえるデリダの眼に、超越的、絶対的な視点の高みは、はなはだおこがましいものに映る。思考はつねに渦中にある運動だ、とかれは考えるからである。そこでバベルの塔の比喩に話が及ぶ。それは「絶対的客観性が不可能であること」の比喩として用いられている。唯一の建築は不可能である。だからこそ建築は可能であり、歴史をもち、自由への道をその不可能性の痕跡としてつくり出す。唯一の建築バベルの否定によって、あらゆる建築の可能性が肯定されたのである。かくしてバベルは遥かな高みから世界を睥睨して不可視のラビリンスに対立し、内在的ロゴスでなく超越的ロゴスを、多様な部分真理でなく唯一の絶対真理を、その不可能性とともに指し示し、崩壊の予感を暗示もして、逆説的にラビリンスの可能性をきわだたせるのである。

バベルでなく、ラビリンス、あるいはアンチ・バベル。デリダは建築という言葉を新たな場所に連れ出した。いやむしろその本来の場所に連れ戻したといってもいいのかもしれない。建築が行為であり思考であって、しかも空間に住みこむ時間の経験としてとらえかえされる。途上にあり、渦中にある、道を切り開く思考、無限の可能性に向けて開かれた思考、唯一絶対の真理への志向を孕みつつもその不可能性の刻印を受け、唯一絶対から逸脱する思考、超越への飛翔を憧れながらも超越でなく内在を生きる思考、言語に漸近しつつ物に即する思考、意識に導かれながら身体を通過する思考、そうした思考の運動の軌跡として、いわば思考の可能性の領野に、かれは建築を位置づけた。

確かに建築とはさまざまの現実的諸条件のただなかで展開される想像力の運動であり、思考の挑戦である。時と場所によって解決すべき与件の選び取り方も無限にあり、それらの優先順位のつけ方も無限にある。唯一の普遍言語でなく、さまざまな様式が共存し展開していることこそが、建築という行為を可能にしている。さらにいうなら、建築という行為をつねに新しいものにしている。

しかしながら、たったひとつの建築の構想には、世界の正義が込められる。唯一の建築に絶対真理

＊45 たとえば、もともと現代の未完結と不連続な気分を体現した建築を集めるというコンセプトの展覧会に、安易に「デコンストラクティヴィスト」という命名をした 1998 年のニューヨーク近代美術館で開かれた展覧会。多くの建築の学生たちばかりか建築家たち、教師たちまでもが、脱構築を構築の否定だと勘違いし、こっけいな議論が巻き起こった。そんな過去の事件をここで想起してみてもいい。そもそもこの展覧会は 1986 年シカゴ、イリノイ大学の展覧会を下敷きにしており、当初から「Violated Perfection」というテーマをもっていた。「犯された完全性」—未完結で不連続な現代を写し取るという意味では、このテーマは実に時宜を得ていたといっていい。この感覚の具現はピカソの「アヴィニョンの娘たち」(1907) を嚆矢とするが、1980 年代のシュナーベルやバスキアの活躍、ステラの変身とも同調している。ただしこれが「デコンストラクティヴィスト」と命名され流通してもっとも当惑したのはデリダであっただろう。「脱構築とは、くだんの構造、諸構造の一種の分析であって、しかもそれは肯定的であって、否定的なものではないのです」: デリダ『他者の言語』p. 216 と述べているように。

＊46 あらためてここで、ハイデガーが konstructiv という言葉によって、「事態そのものに即することなく特定の体系的予断にもとづいて理論を構えること」(傍点筆者) を指した (ハイデガー『存在と時間 (上)』「ハイデガー選集 XVI」細谷貞雄・亀井裕・船橋弘訳、理想社、p. 384 訳注。) ことを想起されたい。デリダの「脱構築」はこの「構築」、すなわち「特定の体系的予断にもとづいて理論を構えること」に異議を申し立てているのである。そこから逃れる「道」を掘り進むこと。デリダの基本姿勢である。

を込める試みが破綻したあとに残されたのは、ひとつひとつの建築に正義を込める行為のみだ。これが建築の倫理である。さまざまな建築が可能であるからこそ、たったひとつの建築に当為を込めること、局所に正しさを求めること、部分的真理を見出すこと、輝ける詩句を「言語の高級な補足として」[*47]書きつけること、輝けるたったひとつの建築を唯一の建築の「高級な補足として」構想すること、ありうべき他者との関係を構築すること。さまざまな建築が可能となったということは、こうしたひとつひとつの建築の正義を求めてよいということを意味しているのであって、決して放埒な妄想にかまけることではない。唯一の建築は不可能であったが、唯一の建築の呼びかけに応答する志の中にしか、たったひとつの建築の正義は成り立ちえない。建築における決定は、一つの建築の正義——個のロゴス——を求めながら、このように原理的に決定不可能なものを決定するという逡巡に満ちた個の責任の上に、理解不能な他者との出会いの経験の上に、決然となされる。

＊47 すでに引いたマラルメの「詩の危機」の中の言葉。

デリダに触発されつつ、さらに考えを進めてみよう。建築は建築物を建てるという行為をめぐる思考の運動に過ぎない。しかしこの建てる、そして住み込むという行為が人類の営みの、すなわち文化の、根幹に関わることから、人間は自身の営み、すなわち存在すること、遊ぶこと、つくること、思考すること、その各々に、建築という行為を重ね合わせて見てきた。世界の成り立ちにも、生物の仕組みにも、論述の段取りにも、記憶の組み立てにも、建築を見てきた。建築の新しい試みが世界の新しい見方に結びついた。建築を通して人間は、自由な想像力を解放するきっかけをつかんだ。世界の雛型をつかんだ。世界を収容する術を得た。物が、空間が、象徴の次元に連れ出され、もう一つ別の世界を描き出す場面に立ち会った。

建築は宇宙を構想する思考の結晶だ。天をめざす塔だ。バベル。にもかかわらず建築はつねに身近にあった。洞窟の暖かさのなかに。アルタミラ。そこに頭脳を、意識を無限の彼方に誘いながら、身体をやさしく包み込む空間があった。意識と身体がそこで結ばれ、宙を生と死の交錯する表象が乱舞した。人はそこで祈った。畏れた。憧れた。それは人間が出会う世界の縮図であり、身体を横たえる拠点であった。すべての感覚を通して人類は建築と交感した。

世界は、宇宙は、象徴的秩序として現象する。ただ個としての人間の思考の試みである建築は、そしてまた物の構想でもある建築は、象徴秩序の破れ目にこそその出発点をもっている。超越的ロゴスから溢れ出る、逃れ去る、エロス。そしてタナトス。これを統合する内在的ロゴス。共同体の幻想に個人的出来事が介入し、観念の運動に物質の惰性が介入する。いわば形而上学を出来事の領域につなぎとめてしまう。これをつなぎとめるのは思考の身体性である。器官なき身体をエロスが走る。共同の幻想と個の幻想が和解する。エロスは走りタナトスに出くわす。ほとばしれば壁に突き当たる。壁は打ち破られ、迂回され、自由の絵が描かれる。エロスの出会う他者は親密な対をなす他者の幻想となる。対の永遠はタナトスの幻想を生み出す。モニュメント。あるいは決して満たされず、到達しえない欲望の先にタナトス的攻撃を夢見る。廃虚。自らのうちに対を閉じて欲望の自己回路を形成する。ニルヴァーナ。エロスとタナトスは循環する。ロゴスがその底を支えている。ロゴスとエロスがロゴスとタナトスが、緊張をもって均衡する。建築における緊張とはこの構図を指す。内在的ロゴスの基底を得て、エロスとタナトスはあたかも生命の運動をする。これに身ぶりで反応したくなる。そこに生成するフィクションを構想者は横断し、通過し、そして移行を続けていくのである。これが建築という思考を生きることである。

建築はいつの時代も人々の想像力をかきたて続けてきた。建築という想像力の解放装置を通して、人類は無限の可能性に向けて旅立つことができた。有限の物質の加工を通して無限に触れることができた。観念の運動を物質の運動に連動させることができた。

だからこそ人類は、倦まずたゆまず建築を構想しつづけ、その歴史を刻みつづけてやまない。解は無限である。道はただひとつではない。だからいつの時代も新たな参入者を迎え入れ、新しい思考の可能性に向けての挑戦が繰り返されている。